

牧師室から (2022.10.30)

以前にこの欄で書いたことがあるが、ロイプケの『詩編94』の説明について、通訳者が Rache (復讐) を Lache (笑い) と訳し間違えたことを、笑いは詩編に馴染まないと言ったことがあるが、今思うと、では復讐はどのようなのだろうかと思い返している。

先日、『復讐の詩編をどう読むか』(E.ツェンガー著)を読んだ。我々キリスト者の多くは詩編を愛読しているが、その美しい詩句や敬虔な信仰のあらわれたものを愛唱句としていると思う。しかし全150編の中には、おぞましいような、激しい復讐の思いを謳い上げているものがいくつかある。カトリックのミサの中では、詩編が用いられる折には、意図的にそのような箇所はカットされてきたということである。とはいえ私自身もかつて仕えていた教会で交読詩編を使っていた際に、やはりそのような箇所は避けることもあったことを思い出した。しかし著者によると、そのような詩編の句もまた神の言葉として読まれるべきであり、祈られなければならないということである。

旧約の神が暴力的なユダヤ教の神であり、新約の神が非暴力の愛のキリスト教の神であるというわけではない。旧・新約聖書を通してご自身を啓示された神はお一人である。

「神の啓示としての聖書が生が多面性、多層性を神の直面させるものだとすれば、聖書の個々の本文にある複雑さを捨象することなく、聖書の正典のなかで生き生きと保たれなければならない」と著者は言っているが、本当にその通りだと思った。

(鈴木淳一牧師)